

カーニヴァル

一八八六年（明治一九年）三月八日、森鷗外は、それまでの滞在地であったドレスデンを發ち、ミュンヘンに向かう車中であつた。

ライプチヒやドレスデンなど、これまでつばら北ドイツに滞在していた鷗外が、いよいよ初めて南部のバイエルン地方に足を踏み入れることとなつたのである。この日の日記を読むと、実に印象的に書かれていることが分かる。思えば鷗外とミュンヘンの関係は、初めの日から特別であつたのだ。

八日。天明車窓より地方を望見せんとするに、氷紋の為に障害せられ、一斑をだに窺ふこと能はず。即ち刀を抜いて之を削る。只見る飛雪天に満ち、車は已に拜焉国境を踰えたるを。彼北独逸の百里の平野には似もやらず、丘陵起伏、松柏鬱茂せり。農婦を見る。紅或は緑の布を纏ひたり。蓋し古の俗なり。午前十一時ミュンヘン府に着し、独帝旅館

Hôtel Deutscher Kaiser に投ず¹⁾。

現代語訳

八日。夜明けに車窓から地方を眺めようとしたが、窓に氷が張ってまったく外が見えない。そこで小刀を抜いて氷を削った。見えたのは、空に満ちるように舞う雪であり、汽車はすでにバイエルンの国境を越えたことが分かった。北ドイツの百里に渡る平野には似ず、丘陵は起伏が激しく、常緑樹が密に茂っている。農婦を見た。紅、あるいは緑の布をまとっている。まさに古い風俗である。午前十一時首府ミュンヘンに到着し、独帝旅館に荷を下ろした。

まず鷗外が記しているのは、ある越境の感覚である。早朝、車窓はびっしりと氷で覆われて、外界の様子をまったく窺うことができない。このような隔絶した状態から記述が始まっている点には、もっと注意が払われている。

鷗外は、小刀を取り出して氷を削り取り、その間隙から興味深げに外を眺める。こうした特異な所作をよく吟味してみれば、鷗外が連続的な旅程としてではなく、来し方との断絶を経た発見の物語としてバイエルン体験を記している点が分かってくる。鷗外が外を覗くと、あたり一帯は舞い落ちる雪で覆われていた。起伏の大きい丘陵や、常緑樹の密なる植生、さらに農婦の古体な衣装も、これまでの北ドイツとは大分異なっているようだ。そうして鷗外は、「車は巴^すに拝^{バイエルン}焉国

境を踰えた」ことを悟るのである。

ただし、ここで語られているのは、単なる地理的な越境ではない。国境を越えると同時にまさに異世界へ参入したことを暗示しているのだ。実際、鷗外がミュンヘン中央駅に降り立ったその日、バイエルンの首府はまさに非日常の最中であつたのである。

ここで、鷗外のここに至るまでの歩みを、簡単に振り返っておこう。

鷗外こと、森林太郎は、文久二年（一八六二年）津和野に生まれた。先祖は代々、津和野で藩の典医、つまり、殿様お抱えの医師をつとめていた。明治維新後、彼は一族とともに上京し、東京帝国大学で医学を学ぶ。

当時、成績優秀者には、官費留学生として海外で学ぶ道が開けていた。かねてより強く洋行を希望していた鷗外は、その目標に向けて勉学に精を出した。しかし、ドイツ人教授と衝突したり、下宿が火事に遭いノートが焼けたりして、卒業試験の成績が芳しくなく、彼は選考から漏れてしまふ。

卒業したのち彼は、友人の強い勧めもあつて、陸軍の軍医部に入った。ちょうどこの時期、軍医を養成するため、陸軍も留学生を海外に送り始めていた。鷗外はそのチャンスをつかみ、念願のドイツ留学を果たしたのである。

一八八四年十月にドイツへ着いた彼は、最初の一年をライプチヒ大学で衛生学と栄養学を学んだ。その後、ザクセン軍医總監のヴィルヘルム・ロートの勧めに応じて、ドレスデンで軍医のための講習を受ける。五か月間の講習が終わった後、衛生学の大家、ミュンヘン大学のマックス・ペッテンコーファーの下で学ぶために、南ドイツに向かった。冒頭で紹介した車中の鷗外の姿は、このときのものである。

引き続き、ミュンヘンに到着した一八八六年三月八日の彼の日記を見てみよう。

此日^{このひ}街上を見るに、仮面^{いたた}を戴き、奇怪^{よそほ}なる装を為したる男女、絡繹^{わづら}織るが如し。蓋^{けだ}し、一月七日より今月九日 Aschermitwoch に至る間は所謂^{いわゆる}謝肉祭「Carneval」なり。「カルネ、ワレ」Carne vale は伊太利の語、肉よさらばといふ義なり。我旧時の盆踊りに伯仲す。

現代語訳

この日、路上を見ると、仮面をかぶり、奇怪な衣装を着た男女が、絶え間なく往来している。ちょうど一月七日から今月の九日の（灰の水曜日）に至る間は、いわゆる謝肉祭である。「カルネ、ワレ」（カーニヴァル）はイタリア語で、肉よさらばという意味である。我々の昔の盆踊りと同じようなものだ。

鷗外が街中で目にしたのは、「仮面を戴き、奇怪なる装を為したる男女」が絶え間なく行き交うさまであった。折しもこの日はカトリック教会暦の〈薔薇の月曜日 Rosenmontag〉にあたり、薔薇といえば聞こえはいいが、この Rosen は、花のローズではなく、「狂乱」を意味する Rasen から派生したともいわれている。すなわち、〈薔薇の月曜日〉は、本来なら〈狂騒の月曜日〉と呼ぶべき特別な日であった。

二日後の「Aschermittwoch」〈灰の水曜日〉からは、キリストの受難を思つて慎む、長い齋戒期（四旬節）が始まる。大齋を控えたこの月曜日は、「肉よさらば」とばかりにさかんに飲み食されてカーニヴァルのお祭り気分が最高潮を迎え、仮装した人々が各所で無礼講の乱痴気騒ぎを繰り広げる特別な日であった。

たとえばこの日の午後、ミュンヘン市内では、伝統行事である〈肉屋の飛び込み Metzger-sprung〉が催された。これは、肉屋の同業組合の古い習慣である。

まず、修業年限に達した徒弟が選ばれ、ペーター教会で祈りをささげる。その後、威儀を正して職人頭や役職者と市内を練り歩き、王宮で供応を受ける。それから、徒弟たちは、中心部のマリエン広場へと行進し、そこで修業の満了が告げられて職人の資格が与えられる。そして彼らは牛の尻尾をあしらった道化の衣装に着替え、最後に威勢よく市庁舎前の噴水に飛び込んだのである。



「肉屋の飛び込み」の様子。扮装をして水をかけ合う徒弟たち（19世紀後半）。

まだ依然として寒い時期である。周囲には水しぶきと同時に大きな叫声と笑声が上がり、卒業を祝うため酒瓶の栓が次々と抜かれた。こうして盛大に沸く中で徒弟は一人前として認められたのである。戒律や伝統、そして諧謔と享樂が入り混じった、いかにも謝肉祭らしいしきたりだといえよう。⁽³⁾

鷗外の日記にはこの「飛び込み」を目にしたという記述はない。だが彼は、午前十一時にミュンヘン駅に到着し、駅前の「独帝客館」に荷を投じた後、当地で医学を学んでいた岩佐新を訪ねるため、市中に赴いている。

当日の新聞の報道によれば、「飛び込み」を見物するため午後二時には二万人の人々が広場に詰め掛けていたらしい。すると、このとき鷗外は、仮面をかぶった人ごみの中で揉まれつつ、浮き立つような祭事の興奮の余波を肌で感じていたはずである。

要するに鷗外は、これ以上ないほどふさわしいかたちで、カーニヴァルの狂騒の中に迎え入れられたのである。いや、迎え入れられたという言葉は、必ずしも適切では